すいはく
No.43 博物館だより

吹田市立博物館
SUITA CITY MUSEUM

夏季特別展特集号

里山

ヒメボタル

ツバメの巣

スイタクワイ

リユース食器

ソーラーカー

まちあるき

吹田市制施行70周年記念事業
平成22年度(2010年度)夏季特別展

吹田の自然と環境
～ヒメボタルのいるまち～

7月17日(土)～8月29日(日)

生物多様性と地球温暖化

わたしたちのまわりには、メタセコイアの大木、クジラやゾウなどの大型のものから細菌やウィルスなど顕微鏡でしか見えないものまでたくさんの生き物がいます。その数は150万種以上、未発見のものを考えると１億種以上になるという説もあります。これらは、30億年以上前に出現したたった一つの細胞が多様に変化しながら生き続け、現在にいたったおどろくべき生命界の姿なのです。

さらに、たいせつなことは、すべての生き物がもちつもたれつの関係でつながっていることです。ところが、人間は万物の霊長、いちばんえらいと思いこみ、自分だけのために生命の世界の秩序を壊しはじめました。

その代表的なものが石油の乱用です。石油が使われるようになって、私たちの生活は快適で便利になりました。ところが一方で、大量の炭酸ガスが排出されて大気圏にたまり、気候が不安定になっています。また、副産物である農薬や化学肥料で土が汚染され、将来の食糧危機が心配されます。そしてもう一つ、飛行機や自動車が発達して人や物の移動がさかんになった結果、インフルエンザなど感染症が短い時間のうちに世界中にひろがるというおそろしい現象がおこっています。

石油に限らず地下にある資源はその量に限りがあるので、いつか枯渇するおそれがあります。太陽光、風、バイオ燃料など、代替エネルギーをさがし、ゴミを資源として再利用しようとする動きもその一つです。私たちの快適な社会は大きなマイナス要素を抱えこんでいるのです。

これらの問題は研究者や政治家が「生物多様性」や「地球温暖化」としてとりあげ、たくさんの意見が出されています。しかし、みんなの一致した意見は、まず野外に出かけて自然を経験することなのです。この特別展は、わたしたちの身のまわりにある自然と環境をもう一度見つめなおし、たのしく学ぼうと企画しました。

（小山修三）

吹田の自然

紫金山全景（1990年撮影）

吹田市は大阪平野の一角にあり標高100m以下の丘陵地が大半を占めています。この丘陵地は1960年代までは棚田と里山がモザイク状に存在し、小さなため池も多く存在していました。里山の大部分はアカマツの低木林やモウソウ竹林で占められていたと考えられます。アカマツ林は関西の代表的な里山林であり、ネジキ、コバノミツバツツジ、モチツツジ、ナツハゼ、コナラ、アベマキ、ヤマウルシなど多くの夏緑樹で構成されていたと考えられます。1960年代から大規模な宅地開発が始まり、これらの里山は分断され、残された部分は孤立してしまいました。さらに、管理が放棄されたためと1980年代から進行したマツ枯れのためにアカマツ林の大部分はなくなり、アラカシなどの常緑樹林に変わってきています。また、竹林の管理もされなくなったため、それが拡大し周辺の林を駆逐するようになりました。これらのことによって林床が暗くなり、夏緑樹の生育や更新が困難となり、生物多様性が低下してきています。孤立した林で一旦消滅した種は、管理を再開したとしても再侵入は困難となります。したがって、現在ある種を保全することが急務なのです。

（武田義明）

ツバメの巣調査

ツバメは春サクラの咲く頃、越冬地の東南アジアから渡ってきて、秋のイネが実る頃南に戻っていく夏鳥です。農村では田畑の上を飛び害虫を食べることから、イネの守り神として人に愛され親しまれ、ツバメもまた人を信頼し、人の生活圏内、民家の軒下など人目につくところに巣をつくり子育てしてきました。

すいた市民環境会議では、1998年に吹田市内のツバメの巣の調査をして合計462巣を見つけることができました。巣が多かったのは、山田東・春日・岸部北・千里山東など吹田市の中央部で、昔からの町並み・旧家が多く残っている農地の多いところでした。

また緑豊かな千里ニュータウンでは、一般住宅に巣はなく、駅前や近隣センターなど人通りの多いところにのみ営巣していました。ツバメの天敵は昔はヘビでしたが、ヘビが少なくなった今はカラスが最大の敵となっています。巣作り場所がだんだんカラスの見えないところに変わってきているのは、カラス対策が高度化しているためと推定できます。

ツバメのひな（垂水町　2010年撮影）

また、人が天敵化したのは、ツバメが害虫を捕ることへの恩恵を感じなくなったうえ、逆に糞が落ちて汚れると憤慨し嫌う人がでてきたためです。

ツバメの巣が多いところは自然度が高いという尺度にはなりませんが、日本では弥生時代に農村に密着した生活をスタートさせたと思われるツバメが、ほぼ全域が市街地化した吹田市でどのように生活様式を変えるのか、あるいは追われて去るのみか、今回のツバメ調査で新しい解答が出ることを楽しみに調査に入っています。

（平　軍二）

ヒメボタルの発光数調査

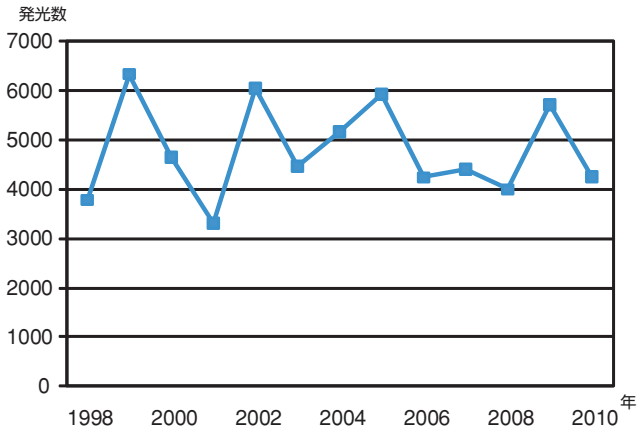
1998年からヒメボタルの発光数を調べています。この調査は、生息数を正確に知るのではなく、棲息状況を把握することが目的で、数の増減が緑地の自然度をあらわすバロメーターになると考えるからです。

グラフは13年間の発光数の推移で、年毎のばらつきはありますが、今のところ絶滅するような兆候はみられません。しかし、家屋や設備の設置などによって生息地が荒らされ、「食物連鎖」の破壊が起きると急速に絶滅へむかうことが危惧されます。

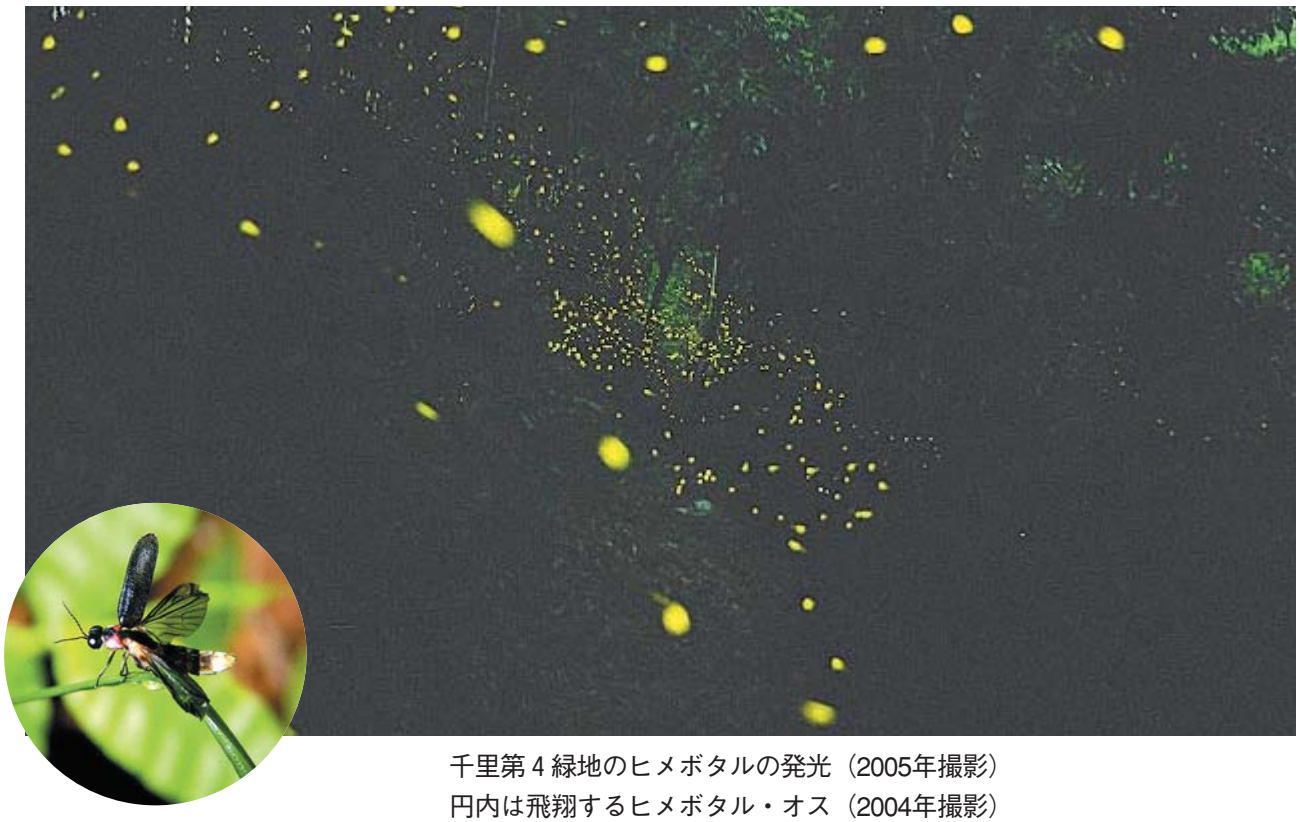
都市のなかの絶海の孤島状態にある千里第４緑地を、社会環境と自然環境の変化に耐える緑地として維持するには、多様な生物の棲む緑地の育成が重要です。そのため単一種が占有する竹林の伐採と雑木を植樹する作業をおこなっています。

ホタルが光るのは、子孫を残す交尾のためだと考えられます。ヒメボタルを飼育して観察すると、成虫は発光を始めるとオスで10日前後、メスでは交尾後24時間程度で死滅します。発光は「命の継承の光」であり、「終焉の光」でもあるのです。また、飛べないメスのところへ通うオスの提灯でもあります。毎年ヒメボタルの発光を見つめていると、この光を守り次世代に伝えることが、わたしたち世代の役割なのだと思うようになりました。

（塩田敏治）



ヒメボタルの年別発光数の推移
（吹田ヒメボタルの会による調査）



千里第４緑地のヒメボタルの発光（2005年撮影）
円内は飛翔するヒメボタル・オス（2004年撮影）

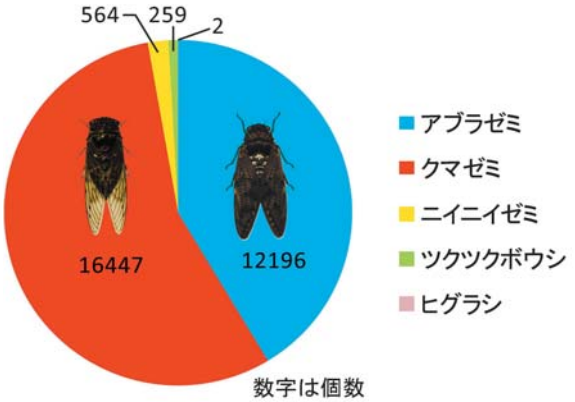
セミのぬけがら調査

平成21年（2009年）夏、吹田市民に呼びかけ、吹田全域でのセミのぬけがら調査をおこないました。実施期間は、小中学校の夏休みの７月初めから９月初めの約２ヶ月間、合計約２万９千個のセミのぬけがらがあつまりました。あつめたセミのぬけがらの種類と数をみると、クマゼミが全体の半数以上、アブラゼミがそれにつぎます。（グラフ）

また、採集場所をみてみると、セミは飛べるので、産卵に適した樹木があれば、そこに子孫を残します。したがって、少しの緑地があればセミのぬけがらはみつかります。緑被率の低い場所でも、校庭、小公園、個人宅の庭、神社などの林、街路樹などからみつかります。ただし、採集地区によってみつかるセミの種類には違いがありました。千里ニュータウンや万博公園など北部はアブラゼミが多く、吹田市南部や江坂方面の都市部ではクマゼミが多いことがわかりました。

これは、アブラゼミは緑が多く地面が湿っているような場所を好み、クマゼミは緑地が少なくて地面が乾燥し固いところでも生息できることを示しています。

このため、クマゼミとアブラゼミの分布を調べると、その地域の自然度を知ることにもなるのです。（高畠耕一郎）



平成21（2009）年にあつめたセミのぬけがらの種類と数

吹田くわい

くわいはオモダカ科の植物で、古くからその塊茎（かいけい）を食用としています。とくに正月のおせち料理に欠かせない素材として親しまれてきました。一般に食用くわいには、白くわい、青くわい、吹田くわいの三種があるといわれています。そのなかで「吹田くわい」は、江戸中期から大坂名物の一つとして多くの文人たちにその味を愛でられ、御所にも献上される吹田の特産品でした。

白くわい、青くわいは中国原産の栽培種ですが、吹田くわいは日本原産でやや小ぶり、野生と栽培の中間的な半栽培植物であることに特徴があります。しかし、急激な都市化と食生活の変化のために忘れ去られ、近年は絶滅寸前まで追いつめられていました。

昭和38年（1963年）に南吹田の田んぼの片隅で再発見されたことが契機となり、保存運動がはじまりました。そして、「吹田くわい保存会」をはじめとするボランティアの尽力で、なにわの伝統野菜の一つとして復活、流通にのせるにはまだ問題がたくさん残っていますが、かなりの生産量を確保できるまでになってきました。

平成20年（2008年）、吹田市は吹田くわいの「ブランド宣言」をおこないました。これをうけて「ブランド『吹田くわい』を広める会」が結成され、吹田くわいを吹田の重要な文化財の一つとして位置づけ、現在その保存と普及活動が精力的におこなわれています。

（北村英一）

吹田くわいの栽培風景

地質と地下水

吹田市は南部の平野部と北部の千里丘陵からなります。平野部と千里丘陵南縁の境目では、崖がほぼ東西に発達しています。北部の千里丘陵では、島熊山から下新田に至る南北方向に伸びる地帯で高度が高く、東側に向かってゆるやかに低くなります。

約300万年前から約130万年前、大阪周辺地域に、低湿地や湖が広がりました。約130万年前に、この地域にはじめて海が進入し、その後、海が進入しては退くということを何度も繰り返し現在に至ります。これらの低湿地・湖・海に周囲の河川から大量の土砂が運ばれて、泥・砂・礫などが堆積しました。こうしてできた地層群のうち約300万年前から約30万年前のものが大阪層群です。

数十万年前から断層運動に伴う隆起運動が激しくなり、六甲山地や生駒山地ができます。このときに、千里丘陵地域も、隆起し、陸化し、浸食などによって大阪層群に谷や尾根が刻まれ、丘陵となります。

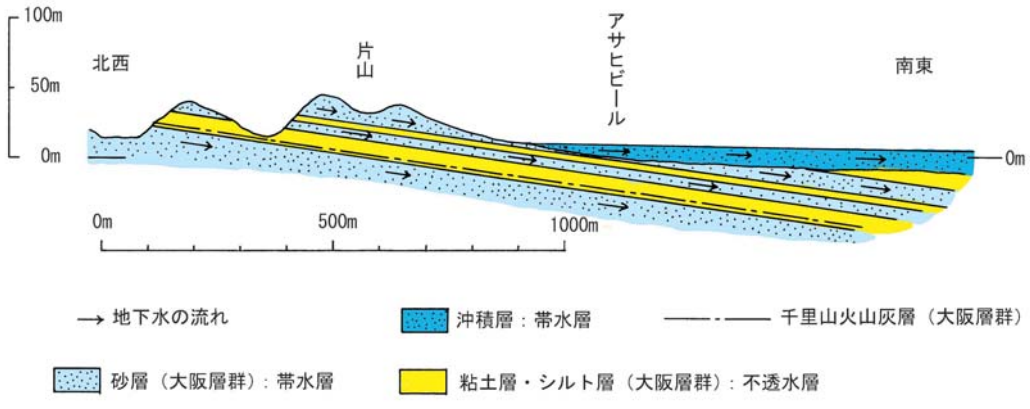
千里丘陵の東部・中央部に位置する吹田市域では、大阪層群はゆるやかに東に傾いています。千里丘陵に降る雨は地下にしみ込み、地層の傾きに沿って透水層の礫層や砂層の中を地下水となって東に流れます。

千里丘陵の東・南に広がる平野部には、大阪層群に刻み込まれた浸食面を覆って沖積層が分布します。千里丘陵との境界は、約6000年前の最高潮となった縄文海進の海岸線とほぼ一致します。吹田の沖積層は沿岸流によってできた砂層に富み、層厚は約15mです。

千里丘陵の地下水や平野部で降る雨はともに沖積層の砂層にしみ込み地下水となります。このため平野部はきわめて水に潤った環境です。

近年、千里丘陵では開発が進み、尾根が削られ、谷が埋められ、町はアスファルトとコンクリートで固められました。これが地下水の流れを妨げ、その水量を減らしています。吹田の生き物や自然への影響が危惧されます。

（林隆夫・平岡由次）



コラム　吹田の水

吹田の南部は、千里丘陵からの湧き水が豊富で、かつて神崎川の周辺の低地は、湿地帯となるくらい水が湧いていました。明治時代になってビール工場が吹田につくられたのも、水質のよい豊富な地下水があったからです。湧き水にまつわる史跡が、佐井の清水、垂水神社の滝、泉殿宮霊泉で、「吹田の三名水」と呼ばれています。

明治の終わり頃（アサヒビール株式会社提供）

吹田の生き物

もっといろいろいるよ！さがしてみよう！

コバノミツバツツジ
（■　2009）

カンサイタンポポ
（◎　2010）

モチツツジ
（■　2003）

ノアザミ
（佐竹台　2006）

ザイフリボク
（■　2005）

スイカズラ
（★　2008）

スイタクワイ
（■　2003）

ハコネウツギ
（★　2008）

コスミレ
（★　2009）

クロバイ
（■　2002）

シロバナサクラタデ
（■　2009）

イチョウウキゴケ
（■　2008）

オオイヌノフグリ
（◎　2003）

ヒメスミレ
（■　2006）

ウワミズザクラ
（藤白台　2009）

スダジイ
（■　2009）

ヒシ
（★　2007）

ウツボグサ
（青山台　2008）

クズ
（■　2007）

イネ
（岸部北　2002）

クスノキ
（関西大学　2009）

ヤブツバキ
（★　2008）

フユノハナワラビ
（●　2006）

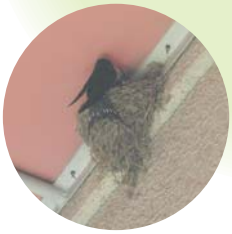
スズメウリ
（●　2006）

キジ
（◎　2009）

カルガモ
（北千里駅前流水池　2009）

コゲラ
（◆　2004）

ジョウビタキ
（◆　2004）



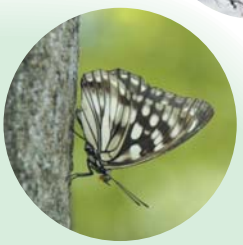
ツバメ
（佐井寺　2010）

ハシブトガラス
（◆　2006）

ハシボソガラス
（◆　2006）

タイワンリス
（藤白公園　2009）

コムラサキ
（■　2006）



ゴマダラチョウ
（■　2002）

ヒメボタル
（★　2008）

シオヤアブ
（佐竹台　2009）

カヤネズミ　巣
（◎　2002）

クマゼミ
（□　2005）

ツマグロヒョウモン
（■　2003）

キマワリ
（★　2008）

ゴミムシ
（★　2009）

イノシシ
（山田川　2002）

ベニイトトンボ
（★　2005）

ムカデ
（★　2009）

カナブン
（■　2006）

カナヘビ
（■　2006）

キツネ
（■　2002）

ヤマナメクジ
（■　2006）

コクワガタ
（■　2002）

アオダイショウ
（□　2001）

タヌキ
（★　2006）

ヒル
（★　2009）

キセルガイ
（★　2008）

アカミミガメ
（▲　2009）

ウシ（佐井寺　1989）

ドジョウ
（■　2007）

カブトエビ
（■　2001）

アメリカザリガニ
（▲　2009）

ウシガエルの
おたまじゃくし
（▲　2007）

低炭素社会をめざして

吹田市のごみ問題

吹田市は人口約35万人、15万４千世帯の都市です。平成20年度（2008年度）のごみ排出量は、約11万7000t、うち事業者38%、家庭62%でした。この10年間で、人口は１万人以上増えていますが、排出量は約2万t減となっています。

この背景は、景気の後退という要因のほかに、長年にわたる吹田市のごみ減量施策の成果が大きいのではないかと考えられます。吹田市では昭和40年（1965年）からの人口増とともにごみ排出量が急増して、ごみ焼却施設の建設場所をめぐる問題や、最終処分場の用地確保に関して議会や市民を巻き込んだ議論がおこりました。

昭和57年（1982年）に北第２工場が稼働しましたが、さらなる、ごみの急増と質的変化に対応するため昭和60年（1985年）に「吹田市廃棄物処理基本構想・基本計画」を制定しました。この計画では、それまでの大量消費・使い捨てというライフスタイルを転換し、ごみの減量化・再資源化・再利用促進に取り組むことを提唱しています。具体的な施策として、全国に先駆けて昭和63年（1988年）より「５種分別」を導入し、平成４年（1992年）には全市で実施しました。また、資源回収に重点をおいた「破砕選別工場」の建設、および、ごみ減量に関する啓発や研究、情報発信の総合的な施設として「資源リサイクルセンター（愛称：くるくるプラザ）」を建設しました。運営団体として大阪府下130社余りの企業等が協力して約９億6000万円の基金を集めて（財）千里リサイクルプラザを設立しました。

くるくるプラザ

この制度が始まり18年が経過しました。当初は、専門家の指導による《脱》焼却の仕組み、ごみ減量の要因分析や意識調査など、学術的な課題に取り組んできました。しかし、設立10年を契機として、より実践的な活動に移行しています。現在は、リサイクルおもちゃ作りや自然素材をつかった染色などの出前講座が人気を博しています。また、「消費者と環境にいいお店作り」を考えるグループは、あるスーパーでの透明トレーの回収を実現しました。さらに、イベントでの使い捨て容器の減量とリユース食器の使用を進めるグループの活動は、事業化されて、市内はもとより全国へ貸し出し事業をおこなっています。その他、食料廃棄や家電リサイクル、生ごみ堆肥化や温暖化防止など、研究対象も廃棄物から低炭素社会への取り組みへと広がっています。ゆっくりと、そしてしっかりと市民による主体的で実践的な環境問題への取り組みが浸透し、根付きつつあるのではないでしょうか。

（中本美智子）

エコイベントの取り組み

資源回収

布工房

ソーラーカー最前線

「吹田の自然と環境」展に、大阪産業大学のソーラーカー「ソラえもん号」がやってきます。担当の村上雅享さん（大阪産業大学）にお話をうかがいました。

――ソラえもん号が作られたのはいつですか？

村上　1992年です。藤子不二雄先生が太陽エネルギーで走る環境にやさしい車という考えに賛同して、ドラえもんをつかった車をデザインしてくれました。長さ5.2m、幅1.98m、高さ1.6m。ボディはCFPR（炭素繊維強化プラスチック）でできています。重さは180kg、最高速度は時速70kmです。ソラえもん号は、小学校をはじめほうぼうにでかけて走らせ、環境の授業に役立てています。

――ソーラーカーの取組みをはじめたのは？

村上　大阪産大では1998年、名古屋で「第一回ソーラーカー世界デザイングランプリ」に参加して大賞を獲得したのが第一歩でした。藤田久和先生はそれ以前から、車の技術開発に取り組んでいました。マイレッジ・マラソンというのがあって、1リットルの石油で何キロ走れるのかに挑む。モーターや軽量化の技術の伝統があるのです。

――日本におけるソーラーカーの歴史は？

村上　1973年のオイルショックで石油価格が高騰し、石油に変わる代替エネルギーが注目されました。その後、地球温暖化や資源枯渇問題が出て再生可能なエネルギーへの関心が国際的に高まったのです。日本では1997年に「新エネルギー法」ができ産学協同の研究を後押しするようになりました。ソラえもん号は今なら140kgでつくれます。時速も2倍、技術はまだまだ進化すると思います。

――新エネルギーとはどんなものですか？

村上　太陽光、太陽熱、バイオマス、風力、地熱、海洋温度差、波力などがあります。アイスランドの地熱、ノルウェーの風力など地域によって特色がありますが、日本では太陽光発電の技術が発達しています。しかし一般的にいって、発電力が弱く、持続的でないので電源が分散されるのが弱点です。計算上では、ゴビ砂漠にソーラーパネルを敷き詰めれば、今の世界の電力はゆうにまかなえるそうです。

ソーラーカープロジェクトを担当している村上さん

――ソーラーカーの時代が来るのでしょうか？

村上　いえ、エネルギーを電池に蓄える電池自動車になるでしょうね。ソーラーパネルだけだと雨や曇りの日には走れませんから。

――すると、原子力がもっと有力になる。

村上　確かに、ウラン1グラムが何万バレルもの石油に匹敵するそうです。しかし、いろいろなリスクがまだ解決されているとはいえません。ぼくたちは天ぷら油で走るバイオ燃料車、燃料電池車、乾電池車など、環境にやさしい車ならなんでも挑戦しています。「少ないエネルギーで、より早く、より遠く」が目標です。大産大では、去年だけで7つの優勝カップをいただきました。はじめからだと、たくさんありすぎて倉庫にしまっています。

　本学には学生が学部の枠をこえて4年間自主的に取り組み問題解決していく教育プログラムがあり、地域の企業の協力をえながら共同作業ですすめています。なかでも環境を意識したテーマが多い。プロジェクトには約500人の学生がいますが、チームを組んでレースに参加し、汗をながす、充実した学生生活だと思います。就職も好調ですよ。「僕のやった仕事がギネスブックにのっています」と言えるのがいいのでしょう。

――ありがとうございました。

市民がつくる博物館

すいはくでは、市民が企画・運営する特別展をおこなっています。これは2006年春の「千里ニュータウン－ひと・まち・くらし－」展からはじまり、2007年秋に「07EXPO70～わたしと万博」展、2008年夏に「千里の竹」展、2009年夏に「吹田市の自然物語」展がおこなわれ、入館者がふえ博物館は活性化しました。

今年は「吹田の自然と環境～ヒメボタルのいるまち～」を開催します。本年度の委員数は38人、展示、イベント、広報部会をつくって活発な意見交換と討議をおこないました。手づくりによる体験展示、学術的市民フォーラムのほか、演劇、音楽、ダンス、こどもたちの工作教室など、50以上のイベントが計画されています。これから市民がどんな博物館をつくっていくのか、ご期待ください。

▶ 2006年「千里ニュータウン　ーひと・まち・くらしー」展

2005.9.NT展展示実行委員会発足

広報媒体としてブログを利用

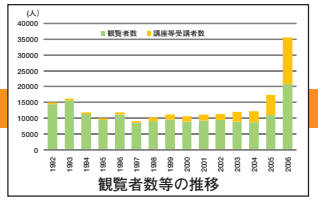
プレイベント
60年代ファッションと音楽

オープニングセレモニー

特別展示場風景

団地１室まるごと展示
佐竹台サテライト

ラジオ生中継



入館者増に貢献

▶ 2007年「07EXPO70　～わたしと万博～」

2007.2万博展展示実行委員会発足

閉店するレストランの看板を譲り受ける
（愛称リオちゃん）

オープニングセレモニー
吹田市民デー

電気自動車を搬入する市民委員

市民フォーラム
「わたしと万博」

ダンボールの太陽の塔

市民の思い出の展示

おでかけ　万博公園

▶ 2009年「吹田市の自然物語」展

特別展示場風景

日食を観察しよう

セミのぬけがら調査

▶ 2010年　プレイベント

演劇「暗くなるまで待って!?
～翔べないヒメちゃんが輝く日～」

市民の活動

「吹田の自然と環境」展
展示実行委員会
└コア会議
（各部会から数名選出）

- 展示部会
- イベント部会
- 広報部会

ブログ
千里ニュータウン+万博×小山修三＝吹田市立博物館！
http://sui-haku.at.webry.info/

吹田くわい保存会

博物館を盛り上げる会

生き物の観察

緑のカーテン

ツバメの巣調査

地質調査

大阪大学

大木調査

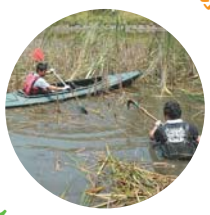
エコおもちゃ作り自然塾

西山田ヒメボタルの会

みんなのまちつくり吹田塾

まちあるき

財団法人千里リサイクルプラザ研究所



ヒメガマ刈り

NPO法人吹田みどりの会

関西大学

劇団にのいち

NPO法人すいた環境学習協会

田植え体験

NPO法人すいた市民環境会議

紫金山みどりの会

演劇

千里竹の会

吹田自然観察会

クワイ普及活動

音楽会

吹田地学会

みんぱく

現代美術を愉しもう塾

アジェンダ21すいた

工作教室

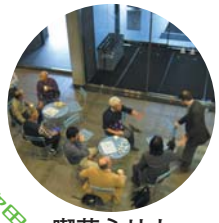
吹田イラストレーター育成塾

トンネルアート

ソーラークッキング実験

ソーラーパネル

千里金蘭大学



喫茶ミリカ

吹田野鳥の会

竹林管理

紫金山グリーン合奏団

大阪学院大学

エコキャップキッズ隊

化け猫一座

ヒメボタル発光数調査

2010年 吹田市生き物調査　調査期間 7月17日～8月29日　調査場所 吹田市内

吹田の生き物地図を作ろう！

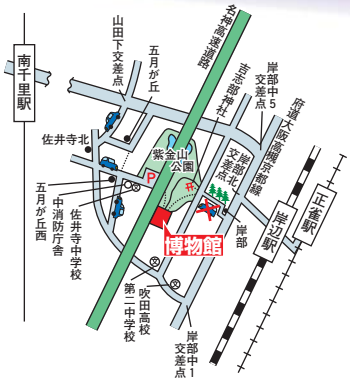
吹田にいる生き物（動物・昆虫・野鳥・魚・木・草花など）をデジカメや携帯で写真にとって博物館にもってくると、パソコンで小さなシールにプリントします。

大きな吹田の地図が展示されているので、見つけた場所にシールを貼るといろんな生き物の様子が一目でわかります。
写真のデータを持ってきた人は、ツバメやヒメボタル、キツネ、吹田くわいなどのイラストが入ったカードが１枚もらえます。

身近にいる
生き物を
観察しよう！

全部あつめよう！

■開館時間／午前9時30分～午後5時15分
■休館日／月曜日（7月19日は開館、翌日の20日は休館）
■観覧料／大人200円（160円）
　高・大学生100円（80円）
　小・中学生50円（40円）
　＊（　　）内は20名以上の団体割引料金
　＊毎週土曜日は市内小・中学生は無料
　　土曜日以外もぐるっとすいたカードをもってくると無料
■すいはくURL　http://www.suita.ed.jp/hak/
　＊このほか、たのしいイベントがたくさんあります。
　　くわしくは、すいはくURLをごらんください。



謝　辞

第一回の実行委員会がひらかれたのが昨年の12月19日でした。それから半年以上熱心な討議を重ねて準備し、この度ようやく開催の運びとなりました。昨年度の「自然」に「環境」を加え、現代社会の現在と将来を考える展覧会を開くことができたのは、実行委員のみなさんをはじめとする吹田市内で活躍しておられる多くの市民の協力とご尽力のたまものと、心より感謝しています。「すいはく」が市民に開かれた博物館となり、知的な遊園地のような存在としておおいに活用されることを願ってやみません。なお、掲載写真については、たくさんの市民および団体から送っていただきました。本来ならば、お一人ずつお名前をあげるべきところですが、残念ながら割愛させていただきます。どうぞご容赦ください。（小山修三）

実行委員会

秋元　宏、秋山恵美子、安達直樹、筏　隆臣、内田正雄、大津忠明、岡崎強一、岡本紀夫、岡本就子、小田忠文、片岡　誠、鎌苅宏司、喜田久美子、北村英一、木村凡之、木村　裕、久次米滋夫、齊藤綾美、佐々木和子、佐々木聖紘、椎橋保彦、塩田敏治、茂見晋司、志田原國雄、篠原直人、高畠耕一郎、武井　貢、中川昌弘、中本美智子、西森健生、林　隆夫、原　美智枝、原田一郎、平　軍二、平岡由次、藤田京子、前川光宏、美濃部　剛

吹田市立博物館だより　第43号　平成22(2010)年7月16日発行
発行　吹田市立博物館　〒564-0001　吹田市岸部北4丁目10番1号　TEL. 06(6338)5500　FAX. 06(6338)9886
編集　平成22年度夏季特別展展示実行委員会広報部　イラスト：はぶようこ
■この冊子は、4,000部制作し、1部あたりの単価は40円です。